

トラック06から一週間後。
とある年の春。

五月二十日。十七時ごろ。

場所は主人公の家が所有するビルの、応接室。

天気は晴れ。室温は二十四度程度。

主人公は今、ブランディングデザイナーの篠田 恭子と話している。

すでに打ち合わせは終わり、二人とも起立している状態。

二人の周囲には、勉強会にはいかなかつたメイドがいる。

●正面 50センチ

（恭子）

「退場まで、すべて主人公に話しかけている。

穏やかに、落ち着いて。

『ちょっとボーカルシユな印象の、格好いい、二十代後半のお姉さん』という感じで。

恭子は今回、主人公に初めて会った。

だが、主人公の事は、あまねからよく聞いている。

そのため以前から好感を抱いており、この度の仕事に関しても、とても楽しみにしていた。

そして実際に主人公と話し、イメージしていた以上の人物だという事がわかつた。
なので、非常に好意的。主人公との仕事にとても意欲があり、前向きである

……では、そのように進めて行きましょう。

本日はお時間ありがとうございました。

とてもいいものになりましたで、今から楽しみです

△主人公△

「こちらこそ、完成が大変楽しみです。

本日はわざわざお越しいただき、本当にありがとうございました！」

主人公、恭子とよい時間が過ごせたのが嬉しくて、深々と、大きく、何度もお礼をする。
少々興奮しすぎて、短い中に『ありがとう』が二回も入つてしまつたが、まあ、これに
関しては言いすぎて困る事はないだろう……。

と、思いながら、恭子に微笑みかける。

△主人公△

「篠田様は、本日電車で来られたのですよね？
お車をお出します。

駅までお送りいたしますね」

●正面 50センチ

△恭子△

「少し驚いた様子で。

ありがたく思いつつも、穏やかに、やんわりと断ろうとする。
さすがにそこまでしてもらうのは申し訳ないので。

恭子は、ビルの外観やあまねの話からして、主人公が相当なお嬢様である事は理解していた。

だが、一方で『家の状況が芳しくない中、頑張っているらしい』『かなりの庶民派』であるとも聞いていた。

なので、そこまでしてもらうのは申し訳なく感じているので
えっ？ いえいえ、とんでもない。
お車を出して頂くなんて……」

主人公の提案に、恭子は少々驚いた様子だ。

やんわりと断ろうとする。

だが、今日の主人公は気にしない。

そうする理由を話せば、きっと恭子も納得してくれるだろうと思つてゐるからだ。

〈主人公〉

「実は、わたしもこれから外出するんです！」

ですから、よろしければ一緒にいきませんか？」

●正面 50センチ

〈恭子〉

「納得がいった様子で。

また『そのような理由であれば、お言葉に甘えてもいいような気がする』と判断したので

……あ。なるほど……。

そうだったんですね。

【にこやかにお礼を言う。

主人公の誘いに、ありがたく応じる事にしたので
ありがとうございます。

では、お言葉に甘えて、ご一緒させて下さい」

〈主人公〉

「ぜひ！ では、行きましょうか」

主人公も移動する旨を告げると、恭子の表情はやわらぎ、同乗に応じてくれる。

主人公の予想通りだ。

だが、主人公の行き先は、決してウキウキ、ハキハキと述べられるようなものではない。

まあ、それは篠田さんには関係ない事だからいいとして……。

と思いながら、主人公は早速恭子と歩き出す。

S E 1 主人公の足音

【最初から最後まで流す】
【繰り返して流す】

【少し響く加工をする】

【SE2と一緒に流す】

【0～5秒ほど流してSE3】

【SE3が止まってから、3秒ほど経つてから『恭子』のセリフ】

【▲1でSE2と一緒に止まる】

SE2 恭子の足音

【最初から最後まで流す】

【繰り返して流す】

【少し響く加工をする】

【SE1と一緒に流す】

【0～5秒ほど流してSE3】

【SE3が止まってから、3秒ほど経つてから『恭子』のセリフ】

【▲1でSE1と一緒に止まる】

SE3 部屋の扉が開く音

【最初から最後まで流す】

●正面 50センチ

（恭子）

「『ふと気になった』という感じで。

『差し支えなければ教えてほしい』という感じで。
どこに出かけるにしろ、主人公はまだ制服を着ているので
ところで……。

あなたは、これからどちらへ？』

SE4 部屋の扉が閉じる音

〔最初から最後まで流す〕

〔背後で、少し小さめの音量で聞こえる〕

すると、廊下に出たところでこんな質問をされた。

主人公は内心

……うつ。

と思いつつ、つとめて明るく、さらつと答える。

〈主人公〉

「学校です！」

●正面 50センチ

〈恭子〉

「少し驚いて。

まさか、そのような答えが返ってくるとは思っていなかつたので

えつ……？

学校へ？」

しかしこの回答は、恭子には驚きのものだつたらしい。

もちろん、驚かれてもしようがない氣はするし、主人公自身、できればこうなる事は避けたかったのだが……。

〈主人公〉

「はい……実は補習がありまして……」

●正面 50センチ

（恭子）

「思わず笑顔になつて。

爽やかに笑う。

主人公の答えが、あまりにも可愛らしいものだつたので
あはは……なるほど！」

主人公がもじもじと打ち明けると、恭子が口を開けて笑つた。

それは、先ほどまでは見せなかつたような、気を許した表情だ。

主人公としては『おおわたしよ、補習になつてしまつとは情けない』としか言えない状況なのだが、恭子には好意的に受け止められたらしい。

……そう。主人公は先週の出来事を経てなお、また授業中に寝たり、テストで芳しくない点数をとつたりしていたせいで、この度現国の補習を受ける事になつてしまつたのだ。

（主人公）

「あー！ 笑いましたね！」

冗談交じりに怒つて見せると、恭子がさらに楽しげにする。

なんとか笑いをこらえながら、釈明までしてくれる。

●正面 50センチ

〈恭子〉

「思わず笑ってしまいながらも、爽やかに謝る。

また、今日主人公に会うまでの心境を、正直に述べていく】

ふふっ……。申し訳ありません。

あなたのような優秀な方から『補習』という言葉を聞いて、つい、安心してしまったんです。

実を言うと今日は、とても緊張していたのですから】

〈主人公〉

「えっ……？」

篠田様がわたしに緊張するなんて、あるんですか？」

だが、今度は主人公が驚かされる番のようだ。

きよとんと尋ねると、恭子は少し照れたように頷く。

主人公は恭子の事を『ものすごく多数かつ、ものすごく有名なクライアントたちと仕事

している、主人公との仕事なんて別段何とも思つてもいな位、すごい人』と思い込んでいたが……。

どうやら、そうではなかつたらしい。

●正面 50センチ

〈恭子〉

「穏やかに、落ち着いて。

今日主人公に会うまでの想いを、正直に述べていく

ええ。緊張しますよ。

あなたの事は、かねてから存じ上げていましたから。
確かに、あまねから話を聞く事はありましたが……。

【ちよつと苦笑して。

『あなたもご存知だとは思いますが……』といふ感じで。

あまねの抽象的だつたり、前向きすぎたりする考え方、伝え方について言つてゐる
ほら、あの子の表現は、ちよつと独特でしよう?』

〈主人公〉

「あはは……確かに」

……言われてみると、確かにわからないでもない。
というか、非常にわかる。

主人公の頭の中に、何やらよくわからない抽象的な表現で話すあまねと、大量の『?』マークを浮かべながらそれを聞き、よくわからないまま相槌を打つている恭子の姿が浮かぶ。

その中で主人公は、ずいぶんとふわふわした説明をされているだろう。

この空想があながち間違つていないものだとすると、恭子の緊張は、途端に自然なものに思えてきた。

●正面 50センチ

〈恭子〉

「穏やかに、落ち着いて。

だがどこか嬉しそうに。

今日主人公と会い、主人公とであれば、とてもよい仕事ができそうだという予感がある

ので

だから、どのような方なのだろうかと、実はドキドキしていたんです。

今日お人柄を知れて、とてもホッとしました」

▲1 ここでS E 1と2がストップする。

二人、ここでエレベーターの前に到着する。

恭子、このタイミングで主人公の方を改めて向き、優しく微笑みかける。

●正面 50センチ

〈恭子〉

「穏やかに、落ち着いて。

だがどこか嬉しそうに。

今日主人公と会い、主人公とであれば、とてもよい仕事ができそうだという予感があるので

あなたとお仕事できる事を光栄に思います。

これからご期待に沿い、お役に立てるよう、尽力致しますね」

〈主人公〉

「…………！」

SE5 エレベーターのチャイムが鳴る音

【最初から最後まで流す】

【小さめの音量で流す】

その時、エレベーターのチャイムが鳴る。

同時に、恭子の白い手が、主人公に差し伸べられ……握手を求めてくれた。

●正面 50セント

〈恭子〉

「爽やかに礼儀正しく。

『改めて、どうぞよろしくお願ひします』といふ感じで】
これからどうぞ……よろしくお願ひします】

一度フェードアウトする。

SE6 夕暮れの教室の環境音

【最初から最後まで流す】

【繰り返して流す】

【0～5秒ほど流してSE7】

【外の音が、窓を閉めた室内で聞こえる】

【フェードアウトするまで流し続ける】

約一時間後。

五月二十日。十八時ごろ。

場所は主人公とシーラが通っている学園の、3年A組。

主人公、教室で一人、補習用の問題を解いている。

先ほどまでは、補習監督として梓がいた。

だが、顧問を務める陸上部で何かあつたようだ。

先ほどジヤージ姿の生徒に呼ばれて、席を外してしまったのである。

なので主人公は、一人、黙々と問題を解いている。

しかし、その表情はにやにやとゆるみ、幸せそのものだ。

恭子との時間が、とても良いものに終わつたからだ。

主人公、

——えっへっへ。

あの、あの篠田さんに、どうぞよろしくされちゃつたあ。
これを聞いたら、シーラ達、きっと喜ぶぞお……。
補習終わつたら、すぐ連絡しなくちやね。

ていうか、本当は移動しながら報告しようと思つたんだけど、スマホ出してる間もなく
できなかつた……。

まあ、シーラも勉強会だらうから、いいか。

かえつてお邪魔になつたかもしれないしね……。

と、次第にゆるんだ表情を暗くさせながら思つていると……。

S E 7 主人公がプリントに文字を書く音
【最初から最後まで流す】

S E 8 教室の扉が開く音

【最初から最後まで流す】

【ほんの最初だけ、S E 7と重ねて流す】

すでに少し開いていた教室の扉が大きく開き、あまねと日菜子がやってきた。

▲ ボイス加工あり

【5メートルほど離れた位置から聞こえる】

●正面 30センチ

〈あまね〉

「主人公に話しかけている。

明るく嬉しそうに。

予想通り、主人公がここにいた事が嬉しいので

ああー！ いたいたあー！

▲ ボイス加工あり

【5メートルほど離れた位置から聞こえる】

●正面 30センチ

〈日菜子〉

「主人公に話しかけている。

穏やかに優しく。

補習にいそしむ主人公をねぎらう
お疲れ様

S E 9　日菜子が差し入れを見せる音

【最初から最後まで流す】

▲ ボイス加工あり

【5メートルほど離れた位置から聞こえる】

●正面 30センチ

〈日菜子〉

「主人公に話しかけている。

穏やかに優しく。

補習にいそしむ主人公をねぎらう。

差し入れのお菓子と飲み物を見せながら言っているイメージで
差し入れ持ってきたよ」

〈主人公〉

「あまね、日菜子……！」

主人公、意外な人物たちの登場に嬉しくなり、思わず立ち上がりそうになる。だが、ひとまずそれはやめて……代わりにぶんぶんと手を振るのにとどめる。するとあまねと日菜子は、そのまま主人公の席まで近づいてくれた。

S E 1 0 あまねの足音

【最初から最後まで流す】

【だんだん近づいてくる】

【S E 1 1と一緒に流す】

【0—5秒ほど流して『あまね』のセリフ】

【セリフと重ねて流す】

【▲2 で S E 1 1と一緒に止まる】

S E 1 1 日菜子の足音

【最初から途中まで流す】

【だんだん近づいてくる】

【S E 1 0と一緒に流す】

【0—5秒ほど流して『あまね』のセリフ】

【セリフと重ねて流す】

【▲2 で SE11と一緒に止まる】

SE12 教室の扉が閉じる音

【最初から最後まで流す】

【SE10と11に重ねるよう、やや遠くで小さく聞こえる】

▲ボイス加工あり

【5メートルほど離れた位置から、だんだん近づいてくる】

【50センチ地点くらいでストップする】

●正面 50センチ

「あまね」

「主人公に話しかけている。

明るく嬉しそうに。」

あまねは今日、主人公と恭子の打ち合わせがあつた事を知つて いる。

なので、打ち合わせ後、すぐに補習に来たのだろう主人公をねぎらう

篠田さんとの打ち合わせ、お疲れ様あ～！

終わつてすぐ補習とか、ほんと大変だねえ」

〈主人公〉

「ありがと！」

補習はまあ、
しやあないよ。

点数やばかつたからね」

正面 50センチ

日菜子

【穏やかに微笑む】

ふ
ふ
ふ

【主人公に話しかけている】

だんだん近づいてきて、主人公の解いている問題が目に入つてから発言するイメージで】
でも、課題は順調みたいだね。

【少し不思議そうに

主人公が教室に一人でおり、補習を担当するはずの梓がない事が、教室に入る前から気になっていたので。

『御影先生』とは梓の事

御影（みかげ）先生は、どこか行つちやつたの？」

SE 13 あまねと日菜子が椅子に座る音

【最初から最後まで流す】

あまねと日菜子、主人公のすぐ近くの椅子に着席する。

〈主人公〉

「そうそう。

何か陸部の子に呼ばれてそつち行つちやつた。
なかなか戻つてこないのよ」

主人公が答えると、日菜子は『なるほど』と小さく頷く。

だがあまねは、何だか残念そうだ。

彼女には、他にも予想外の事があつたらしい。

●正面 50センチ

〈あまね〉

「主人公に話しかけている。

きよとんと不思議そうに。

梓だけではなく、シーラもいない事に気づいたので

そうなんだ。

しいちゃんもいないね～？

△主人公

「あ……」

主人公、その言葉の意味するところを理解して、先ほどの日菜子の真似をするようく小さく頷く。

あまねにとつて、主人公とシーラはいつも一緒にいるもの。

たとえシーラが補習を受けなくとも、ボディガードとして帶同しているもの。

そう思つたのにここにいないから、驚いているのだろう。

●正面 50センチ

△日菜子

「あまねに話しかけている。

苦笑しつつ、あまねをたしなめる】

あまね。シーラちゃんは今日、勉強会でしょ」

●正面 50センチ

「あまね

「主人公と日菜子に話しかけている。

『確かにそうだったあ！』という感じで。

あまねにとつて、主人公とシーラは、常に一緒にいるもの。

たとえ主人公のみが補習であろうと、シーラも同行するものだと思つていたので。
また、過去に、実際にそのような事があつたので

あー！ そつかあ！

「主人公

「そくそく。

シーラは今日、志保達と勉強会だよ。

また学校まで来てもらうのも悪いし、終わった後は直帰してもらう事にしてる」

主人公、すっかりあまねの口調が移つてしまいながら、最後の問題の答えを書き、解答の見直しを始める。

梓の帰還を待つうち、主人公は最終問題まで解き終えてしまった。

後はもうこれを提出すれば帰れるのだが、梓はまだ戻ってくる気配がない。

●正面 50センチ

「あまね」

「主人公と日菜子に話しかけている。

ちょっと残念そうに、また、納得が行かない様子で。

シーラは時間の許す限り、主人公のそばに居るものだと思っているので

何（なん）か最近、別行動多めだよね。

しいちゃん、すつごく忙しそう」

●正面 50センチ

「日菜子」

「主人公とあまねに話しかけている。

穏やかに、だが少し残念そうに。

※説明セリフなので、ややゆっくりめ※ に。

シーラの現状について、自身の知っている範囲で述べていく

シーラちゃん。勉強会への参加表明がきつかけで、すごくやる気だと思われちゃって。

志保さんに色々薦められてるんだっけ

「主人公」

「そうなのよお。

おかげですごい忙しくなつちやつたけど、何か楽しそうにやってるよ。

シーラも『見聞を広められて嬉しい』って言つてたし。
わたしも負けずに頑張らなくつちやね』

主人公、見直しを終えるとともに、二人を笑顔で見上げる。

主人公としては、少々淋しくはある。

いや、正直な所、かなり淋しくはあるが、それでも前向きに、明るい展望をもつて答えたつもりだ。

……しかし、あまねは暗い表情のままだ。

シーラに会えなくて、そんなにも残念なのだろうか。

主人公がそう思つていると、あまねは主人公を見てこう尋ねた。

●正面 50センチ

「あまね」

「主人公と日菜子に話しかけている。

わかりやすく残念そうに。

あまねはシーラに会いたかったので。

また『主人公もさぞ淋しいだろうなあ、残念だらうなあ』と思つてゐるので

はあ。淋しいねえ……。

【主人公に話しかけている。

同意を求める感じで】

淋しいよねえ？

△主人公△

「……えつ？」

主人公、ストレートに問われた事で、急に自信がなくなつていく。

主人公は今の状況を、とてもいいものだと思つてゐる。

といふか、いいものだと思おうとしている。

なのにあまねは、とてもそうではなさそうだ。

おまけに日菜子も、気遣うような目で主人公を見つめている。

これは一体、どういう事なのだろう？

―― て い う か この 調 子 だ と 、 曜 菓 子 も あまね 側 つ ぽ い …… ？
で も 、 ど う し て ？

い つ も ベタベタ し て る よ り 、 お 互 い 別 々 の 世 界 や 、 自 分 ひ と り の 時 間 も 持 つ て る 方 が 、
格 好 い カ ッ プ ル つ て 感 じ が 、 し な い ？

と 、 主 人 公 が 、 誰 に 同 意 を 求 め る で も な く 考 え 、

〈 主 人 公 〉

「 …… そ り や あ 、 淋 し い と は 思 つ て る け ピ 。

こ れ も 、 必 要 な 事 だ し ？

い つ も く つ つ い て 行 動 し て る だ け じ や 、 い け な い と 思 う し つ ？

前 向 き に 捉 え て ま す よ お …… ？ 」

な ど と 、 ど こ か 言 い 訳 じ み た 返 答 を し て も …… 。

● 正 面 50 センチ

〈 あまね 〉

「主人公に話しかけている。

『あまりよくわからない』という感じで。

あまねは、主人公の主張 자체は理解しており、間違っていないと思っている。

だが、その割には、シーラがそこまで楽しそうには見えないし、主人公は淋しそうなので

「へえ？……？」

（主人公）

「だ、だつてほら！」

わたしはシーラと、お嬢様とメイドの関係じやなくて。
もつと！ 対等な関係を目指していますからね！

いつもただ一緒にいるんじやなくて。

お互いの成長のためには、別々に過ごす事も覚えたつて訳！

将来的には、絶対その方がうまく行くでしょ？」

（正面 50センチ）

（あまね）

「主人公に話しかけている。

しょぼんとした様子で。

主人公の言葉を復唱している

対等、かあ

二人はなぜかこの調子だ。

顔を見合わせ、揃って浮かない表情でいる。

●正面 50センチ

（日菜子）

（少し独り言っぽく）

穏やかに優しく、だが、納得はしない様子で。

主人公の言葉を復唱している

対等かあ……

（主人公）

（そう！ そうそう！ 対等！ 対等です！）

だからいよいよ強く言い切ると、あまねの口が、露骨にへの字になつた。

主人公なりに囁み碎いて説明したつもりなのだが、まだ納得してくれていないうらし。

●正面 50センチ

「あまね

「主人公に話しかけている。

『あまりよくわからないので、確認したい』という感じで】

つまりい。

二人は今、

『より対等』を自信なさげに。

『この解釈でいいの?』という感じで。

あまね自身、この解釈でいいか自信がないし、たとえ正解でも『あまりよくわからない考え方だなあ』と思っているので】

『より対等』

な関係になる為に。

ばらばらに頑張つてるって事? ?

【少し間をあけてから。

きょとんと不思議そうに。

純粹に疑問に思っている感じで。

※批判的、否定的な感じにならないようにお願いします※

だから、淋しくても我慢してるの？』

〈主人公〉

「……そうです！ 少なくとも、わたしはね！」

ゆえに、主人公もだんだん引き返せなくなつてくる。

だが、せめて無駄に胸を張りながら答えてはみるもの、すでに主人公は、

……シーラは、どう思つてるか知らないけど……。

もしかすると『ボディガードより外で勉強するほうがずっと楽しいじやん！ もつとこ
つち方面の仕事入れたい！ 今後お嬢様の世話は、他のメイドに任せとこ！』とかつて、
思つてるかもしれないけど……。

などと考え始めており、すっかり自信をなくしている。

主人公はこの『別行動多め』な現状を、一時的なもの。

あるいは、今後継続的にではあるが、そう多くの割合を占めないものとして捉えている。

だから、我慢する事ができている。

……だが、シーラはそうは思っていないかも知れない。

もしかすると、今回の経験を基に、今後別々の時間の割合を、どんどん増やしていくつもりかも知れない。

そう思つたら……だんだん淋しさの方が多くなつて、不安が強まって来てしまつたのだ。

●正面 50センチ

「あまねく

「主人公に話しかけている。

納得しきれていない感じで。

『やつぱりあまりよくわからない』と思つているので一

ふう……ん？

【自分の素直な気持ちを述べる。

『主人公と自分の考えが違うのは仕方ない。だが、これは伝えておくべきだ』と思つて
いるので。

※批判的、否定的な感じにならないようにお願いします※

でもおう。

しいちゃんは絶対淋しがつてるよねえ？』

△主人公△

「え？」

だから、あまねの発言は予想外だった。

もし淋しく思つたり、不安を感じたりするのであれば、それは主人公だけ。少なくとも、主人公はそう考えていたからだ。

●正面 50セント

△日菜子△

「〔※息づかいのみ※〕で表現する。

小さく息をのむ。

穏やかな反応だが『え？』という主人公の回答に、内心少し呆れています。

なので、主人公に対して『『え？』という事はないだろう……まさか気づいていないのかな……』と思つて いる。

だが、今はまだ主人公とあまねの会話を見守つていようと思つて いるので黙つて いる

……」

（主人公）

「いやいや。そんなまさか、シーラだよお？
あのシーラ。」

『年齢プラス10か？ 20か？』つてくらい達観してのシーラが、ちょっとわたしと
離れるくらいで、淋しいなんて思う訳ないじやん』

●正面 50センチ

（あまね）

「少し驚いて。
まさか、そんな答えが返ってくるとは思っていなかつたので。
※批判的、否定的な感じにならないようにお願いします※」
ええ？

今、そんなまさかつて言つた？』

（主人公）

「そう、だけど……」

●正面 50センチ

〈日菜子〉

「〔※息づかいのみ※ で表現する。」

日菜子としても言いたい事はある。

だが、今はまだ主人公とあまねの会話を見守つていようと思つて いるので

……」

●正面 50センチ

〈あまね〉

「少し困った様子で。

言葉を選ぼうとするがゆえに、言いよどんでいる感じで。

主人公が想像以上に、シーラの感情に鈍い事がわかつたので

……えーっとお……」

しかし、今日はとことん、二人と意見が合わないようだ。

主人公が己の意見を述べれば述べる程、あまねは困惑し、日菜子は静かになる。

それでも主人公は一体何がおかしいのかわからず、とうとう言葉を失つてしまつた。すると、そこで助け舟を出すように、日菜子が話し出す。

●正面 50センチ

（日菜子）

「〔※息づかいのみ※ で表現する。

一度、小さく息を吸つてから話し始めるイメージで】

……。

【少し間をあけてから。

穏やかに優しく。

だが、大切な話を切り出す感じで。

先週から感じていた疑問について、主人公と話し合う時が来たと感じたので】

そうだな……。

あのね。

急にごめんね。

ちょっと、違う話してもいい？】

（主人公）

「へ？」

もしかすると、話題を変える事で、この場の雰囲気を変えようとしているのだろうか。

日菜子の提案に主人公は虚を突かれるが、まずは素直に頷く。
日菜子は無意味な提案をする女性ではない。
であれば、まずは従おうと思つたのだ。

●正面 50センチ

〈あまね〉

「少し不思議そうに。

日菜子の意図は、何となくだが理解している。

『日菜子は今から、全く無関係の話を始める訳ではないだろう。何か関連のある話をす
るつもりなのだろう』という事まではわかつている。

だが、それが具体的になんのかまでは、よくわからないので
うん……？』

●正面 50センチ

〈日菜子〉

「穏やかに優しく。

『ここから、主人公をそつと諭すように話し始める』
この前の。現国の授業の事』

「主人公」

「……うん」

しかし切り出された話題は、シーラと関連しているのか、していないのか、どうにも判断しかねるものだ。

確かに主人公は、今の現国の中教材である小説に、並々ならぬ関心と共感を寄せている。だが、彼らはあくまで架空の人物だ。

内容について語り合うにしろ、これまで日菜子がこの作品に別段興味を持つてているようには見えなかつた。

だから、このチヨイスは少々不思議に思える。

主人公は要領を得ないままひとまず頷き、それはあまねも同様のように見える。

●正面 50センチ

「日菜子」

「穏やかに優しく。

※これまでの内容を振り返るセリフ※ なので、ややゆっくりめに。
まずは、トラック01で主人公が語った、作品の解釈について述べる】

あの時あなたは、

『小説の『主人公』は、ヒロインである『彼女』と対等になりたいと思つて いる』

『そうするには、まず、彼女を様々なしがらみから解放し、選択の余地がある状態にしなくてはいけない』

『そうする事で、彼女は救われ、一人の人間として独立する事ができるからだ』

【少し間をあけてから。】

一行前を踏まえて『その時二人は、真に対等になれる』ので

『その時二人は、真に対等になれる』

【少し間をあけてから。】

確認するような感じで。

『そう考へて いるから、今は無茶をして いる』のは、小説の主人公も、いま語りかけている主人公も同じなので】

『そう主人公は考へて いるから、今は無茶をして いる』のは、小説の主人公も、いま語りかけてつて、言つたよね。

【穩やかに優しく。】

今度は、主人公の解釈に対し、自分の意見を述べる】

……でも、その意見。

私はちょっと、あなたの主観が多く入つてゐなつて思つたの。

あなたの考える主人公は、ちよつと、対等になる事を重視しすぎてるなって。
もちろん、色々な解釈があつていいと思う。
ただ、私のとは、ちよつと違う。そう思つたの」

「主人公」

「え……？」

そこへ来たこの指摘は、意外そのものだ。

だが日菜子は、唐突にこんな話をしている訳ではないだろう。

それに、『小説の主人公』と『ヒロインである彼女』を、それぞれ何と関連付けて話そう
としているのかは……鈍い主人公でも、わかってきた気がする。

●正面 50センチ

「あまね」

「『なるほど』という感じで。

あくまで中立の立場で続きを促す。

あまねは、日菜子の意図をまだ、完全にはわかつていない。

だが、このまま日菜子が話しやすい環境を作ろうと思つている

へえー……ひなちゃん、そんな事考えてたんだー?』

●正面 50センチ

〈日菜子〉

「穏やかに優しく。

※重要なセリフ※ なので、ややゆっくりめに。

今度は、自分なりの解釈を述べている。

だが、それは結果的に、シーラの心情を述べたものになる。

『小説の主人公』『主人公』『彼女』『シーラ』として話している】
うん。

だから……今日は、私の解釈を言うね。

私が思うに。

【あえて『気持ちはあると思う』という『とても積極的というわけではない』表現にとどめて話す】

『主人公』が望むように、『彼女』もまた、主人公と対等になりたい気持ちはあると思う。【自然なようで、あえてこの表現をしている。

あまねと日菜子は、シーラから『主人公にふさわしいメイドになりたいので、勉強会など、色々チャレンジしてみる事にした』と聞いているので】

……それは、主人公にふさわしい人物になりたいから」

「主人公」

「ふさわ……しい……」

“ええ。私も。

少しでもお嬢様にふさわしい存在になりとうございますから”

主人公の脳裏に、一週間前のシーラの発言が蘇る。

そうだ。あの時シーラは、主人公にふさわしい存在になりたいから、勉強会に行つてみると言つた。

この一週間を過ごして、彼女の心境がどう変化したかはわからない。

だが、少なくとも一週間前までは……主人公のために、別々に過ごす事を承諾していたのだ。

●正面 50センチ

「日菜子」

「穏やかに優しく。

※重要なセリフ※ なので、ややゆつくりめに。

今度は、自分なりの解釈を述べている。

だが、それは結果的に、シーラの心情を述べたものになる。

『小説の主人公』『主人公』『彼女』『シーラ』として話している。
また、シーラの様子から推測した事を話している』

彼女は、自分に選択肢を与える為に頑張っている主人公に恩を感じているし……。
その姿を尊敬している。

だから、たとえ、一緒にいられない事で淋しい思いをしても。
きっと何も言わないと思う』

●正面 50センチ

〈あまね〉

「〔※息づかいのみ※ で表現する。

納得して息をのむ。

『なるほど、日菜子はそういう事を伝えたかったのか』という感じで】

……！

……だからもし、主人公が今考えるようだ。

日菜子が『小説の『主人公』と『彼女』と『主人公とシーラ』の関係を、なぞらえて話してくれているなら。

日菜子、いや、日菜子とあまねは、既に見てきたのではないだろうか。

『たとえ、一緒にいられない事で淋しい思いをしても。きっと何も言わない』シーラの事を。

●正面 50センチ

（日菜子）

「【穏やかに優しく。

※重要なセリフ※

なので、ややゆつくりめに。

今度は、自分なりの解釈を述べている。

これは同時に、主人公への問いかけ、そして要望を述べたものもある】
だから。この課題にはないし。

小説でも描かれる事はなかつたけど……。

もし、この解釈が『意外と近いかも』『正解かも』って思つた時。

『主人公』は、どうするんだろう。って思う事があるの。

【穏やかに優しく。

主人公を優しく諭す感じで】

……あなたは、どう思う？

主人公は、どうするのかな？

〈主人公〉

「……」

日菜子が、主人公を正面から見つめて問う。

SE14 あまねのスマホの通知音

【最初から最後まで流す】

だが、主人公が息をのみ、返事をしようとした瞬間、ふいにスマホの通知音が鳴った。

〈主人公〉

「……！」

●正面 50センチ

〈あまね〉

「スマホを見てひとりごとを言っている。

きやつきやと嬉しそうに。

あまねは主人公と日菜子が話している間に、これからどうするべきかを察し、シーラに『今どこにいるの?』と連絡していた。

その返事が来た上、アクセスしやすいところにシーラがいるとわかったので【あう♥】

……どうやら、あまねのものようだ。

だがあまねは、会話が止まつた事を気にも留めぬ様子でスマホの画面を確認すると、そのまま数回の操作を行う。

それからくるつと主人公と日菜子を見て……嬉しそうにこう言つた。

●正面 50セんチ

『あまね』

「主人公と日菜子に話しかけている。

きやつきやと嬉しそうに。

あまねは主人公と日菜子が話している間に、これからどうするべきかを察し、シーラに

『今どこにいるの?』と連絡していた。

その返事が来た上、アクセスしやすいところにシーラがいるとわかったので
返事きたあ ❤』

●正面 50センチ

〈日菜子〉

「あまねに話しかけている。

穏やかに優しく。

答えを半ばわかつていて、あえて尋ねる感じで】

ん? 誰から?』

●正面 50センチ

〈あまね〉

「主人公と日菜子に話しかけている。

きやつきやと嬉しそうに。

早速、シーラが今どうしているのかを二人に告げる】

いちゃん ❤』

（主人公）

「……！」

●正面 50センチ

（あまね）

「主人公と日菜子に話しかけている。

きやつきやと嬉しそうに。

早速、シーラが今どうしているかを二人に告げる

今どうしてなのか、気になつたから聞いたの

♥

『勉強会終わつて、お庭の手入れしてまゝす』だつて

♥

ここで、主人公と日菜子の二人に話しかけていたはずのあまねが、まつすぐに主人公に身体を向ける。

それはあまりにもストレートな表現だ。

だから鈍感な主人公でも、なぜ、あまねがシーラに連絡してくれたのか、もうわかつてしまつた。

●正面 50センチ

＼あまね＼

「主人公に話しかけている。

につこりと。

『とつても暇で、時間ある』を強調して言う。

実際はシーラはそうとまでは言つてないが、絶対にそうだと確信して言う。暗に主人公に『今すぐ会つておいでの』と促したいので

今はとつても暇で、時間あるつて
♥

SE15 主人公が机から立ち上がる音

【最初から最後まで流す】

ゆえに主人公は、衝動的に立ち上がる。梓が戻る気配はない。

だから主人公は、本来まだここを出てはいけない。
でも、今すぐにしたい事があつた。

会いたい人に会う事だ。

〈主人公〉

「……行つても、いいのかな」

●正面 50センチ

〈日菜子〉

「穏やかに優しく。

主人公の発言の意図を理解しつつ、あえて確認する。

主人公の意思をはつきりさせておきたいので
ん？ どこへ行くの？」

そんな主人公に、日菜子があえて問う。

普段はとても温厚な日菜子だが、今回は相当心配させ、また、呆れさせてしまったよう
だ。

一方的な暴走で友人を困らせた主人公に、明確な意思表示を求めてくる。

〈主人公〉

『あの小説の主人公』だつたら、行くだろう、つて、ところ』

●正面 50センチ

〈日菜子〉

「主人公に話しかけている。

穏やかに優しく。

あくまで『どこへ行くのかはわからないが……』という体で話しつつ、肯定する

そうなんだ。

【少し間をあけてから。

机の上に置かれた課題の完成度合いを、一度見てから話し始めるイメージで】

まあ、課題はできてるみたいだし……。

どうしても外せない用事があるなら、仕方ないとと思う。

御影先生には、私達が代わりに渡しておいてあげる】

●正面 50センチ

〈あまね〉

「主人公に話しかけている。

きやつきやと嬉しそうに。

『ぜひそうするといい』という感じで】

そうだね♪

『すつごい大事な急用ができちゃったみたい』って、先生にはうまく言つとく

♥』

日菜子が微笑み、あまねが背中を押してくれる。

だから主人公はかばんを手に取ると、すぐさま教室の外へと駆け出した。

S E 1 6 主人が荷物を持ち上げる音

【最初から最後まで流す】

△主人公△

「ありがとう……日菜子、あまね！」

……行つてくる！」

△正面 50センチ

△日菜子△

「主人公に話しかけている。
穏やかに優しく」

「気をつけてね」

●正面 50センチ

「あまね

「主人公に話しかけている。

きやつきやと嬉しそうに。

『応援してるよ♥』といふ感じで

いってらっしゃい♥』

SE17 主人公が歩き出す音

【最初から最後まで流す】

【だんだん早くなる】

【だんだんフェードアウトする】

一度フェードアウトする。

数十分後。

五月二十日。十八時すぎ。

場所は主人公の自宅、庭園。

主人公、庭を、シーラを探して歩いている。

SE18 外の環境音

【最初から最後まで流す】

【0～5秒ほどまで流して SE19】

【その後、ごく小さな音量で流す】

【トラック終了まで流し続ける】

SE19 主人公の足音

【最初から最後まで流す】

すると、向こうから誰かが近づいてくる。

さすがはシーラだ。

足音から主人公が近くにいると察して、迎えに来てくれたのだろう。

SE20 シーラの足音

【最初から最後まで流す】

【だんだん近づいてくる】

【とても遠い位置から、2メートル地点くらい離れた所で止まる】

▲ ボイス加工あり

【2メートルほど離れた位置から聞こえる】

●正面 30センチ

「少し驚いた様子で。

主人公の存在に気づいたので、急いで歩いてきた。

だが、なぜ、主人公がここにいるのかはわからない。

『まだ補習を受けているはずではないのか』と思つている

お嬢様……？』

△主人公

「……やあ、シーラあ……」

主人公、シーラの姿を認めると、切れた息も隠さず、不自然に軽く手を挙げ、少々苦しげに挨拶する。

▲ ボイス加工あり

【2メートルほど離れた位置から聞こえる】

【だんだん近づいてきて、正面30センチの距離で止まる】

●正面 30センチ

「少し驚いた様子で。

なぜ、主人公がここにいるのかわからないので】

なぜ、こちらへ……。

補習は、いかがなされたのですか？」

〈主人公〉

「んー？

……えーっと……。えーっとねえ……」

……かと思えば、照れてあからさまに目をそらしてみたり、前髪を触つて今更整えるふりをしたりと落ち着かない。

ご存知の通り、主人公はシーラを探して、学校から一目散にここへ来た。なのに、いざ彼女を見つけると、急に恥ずかしくなってしまったのだ。

それは、久しぶりにゆつくり一緒にいられるかもしれないのが嬉しくて。同時に、とても不安でもあるからだ。だから、

……つい盛り上がり、ここまで走ってきたはいいけど。
会いたいと思つてたのは、わたしだけだつたらどうしよう……。

そう思つてしまふと急に上手く言葉が出なくなつて、困つてしまつたのだ。
なので主人公は、いささか奇妙な拳動をしながら近づいて行く。
対するシーラは、普段とまるで変わらない様子で、こちらへ歩いて来てくれる。

▲ボイス加工あり

〔2メートルほど離れた位置から聞こえる〕

〔だんだん近づいてきて、正面30センチの距離で止まる〕

●正面 30センチ

〔優しく穏やかに。〕

主人公の言葉を復唱して、続きを促している
えつと？」

〈主人公〉

「補習……爆速で、終わつたから。
……シーラに会いたくて！」

早く帰つてきちゃつたよ～……♥」

主人公、勇気を出して素直な思いを打ち明けてみたつもりが、今度はなんだか冗談っぽく聞こえてしまう。

……なんでこう、わたしはいつもこうなのか。
シーラとは『一体何年付き合つてるんだ』って関係のはずなのに。
なんでこう、いまだに毎回こうなのか。

そう思いながらも、すぐそばまで向かっていく。

●正面 30センチ

「少し安心した様子で。

少なくとも、補習はちゃんと終えてきたらしい事がわかつたので
然様（さよう）で、ございましたか……。

【穏やかに優しく。

思わず抱きしめたくなる衝動をこらえて、普段通り、主人公をねぎらう。
この一週間ほど非常に忙しく、あまり主人公と過ごせなかつた事。

それを淋しく思う気持ちは隠している

お帰りなさいませ。

本日も、大変お疲れ様でございました』

『主人公』

『シーラは！

シーラは勉強会、どうだつた？

志保たちにも後で聞くけど、シーラ的にはどうだつた？』

こうして二人の、ちよつと不自然な会話が始まる。

いや、様子がおかしいのは主人公だけで、シーラはいつも通りなのだろう。

そう思い主人公は悔しくなるが、すぐに『いいや、本当にそうだろうか？』と気づく。

⋮⋮ 果たして『本当にそう』で『シーラはいつも通り』なら。

あまねと日菜子は、先ほどあのような事を言つただろうか？

『本当はそうじやない』

『シーラはずつといつも通り風にしているけど、本当はいつも通りじやない』

そう判断したから、主人公はここまで来たのではないか？

●正面 30センチ

「穩やかに優しく。

主人公の質問に答え、また感謝の気持ちを述べる。

この一週間ほど非常に忙しく、あまり主人公と過ごせなかつた事。

それを淋しく思う気持ちは隠している」

……はい。

私（わたくし）の方は滞りなく。

大変充実した時間を過ごして参りました。

どこでも、とてもよい経験をさせて頂き。

大きな糧になつたと感じております。

【特に丁寧に。

『改めまして、ありがとうございます』という感じで】

お嬢様、ありがとうございました』

（主人公）

「そつ、か」

目の前のシーラはいつも通り穏微笑んでおり、その姿は、いつもと何も変わらないように見える。

あまりに普段通りだから、一度は決めたはずの主人公の決断も揺れる。

●正面 30センチ

「穏やかに優しく。

主人公を気遣う。

自分の事ではなく、主人公の事に話題を切り替えようとする。

このまま自分の事を話していると、淋しかった事を吐露してしまいそうなので】

それよりも。

お嬢様は、いかがでございました？

篠田様と打ち合わせされ、補習にも行かれて、さぞお疲れでしょう。

中へ入つて、何か温かいものでも……』

△主人公△

「……あのね、シーラ」

●正面 30センチ

「少し不思議そうに。

主人公が何を言おうとしているのか、見当もつかないので。
また、主人公が何やら神妙な様子でいるのが気になるので】
……え？」

だけど主人公は、もう一度勇気を出してみる。

自分よりもずっと背の高いシーラに、少々背伸びして、正面から見上げ。
今の想いを、正直に伝えてみる。

そうでなければ、ここまで走ってきた意味がない。

背中を押してくれた日菜子とあまねにも申し訳ない。
そう思つたのだ。

〈主人公〉

「ごめん。

わたし、もしかすると、今週ずっと勘違いしてたかもしれない。
シーラのためとか思つて色々提案しちやつてたけど……。
もし、やりたくない事無理にやらせてたなら、本当にごめん」

●正面 30センチ

「優しく、だが少し驚いて。

主人公がこのような事を言い出すとは思っていなかつたので】

お嬢様……？」

急に切り出した主人公を、シーラが少し驚いた様子で見つめている。

人気のない広い庭園で、不思議そうに目を見開いている。

それは『何と返すべきだろうか』という、少し困った顔に思える。

やはり、もしかするとすべては主人公の勘違いで、これは見当違ひな謝罪なのかもしれない。

だが、たとえそうだとしても、まずはここからだ。

主人公は謝りながら、少しずつ自分の気持ちを述べて行く事にした。

〈主人公〉

「……さつき、あまねと日菜子に言われてやつと気づいたんだよね。

わたし、シーラがOKしてくれたから、シーラは今回の勉強会とかに乗り気なんだろうつて、勘違いしてたけど。

別にそうじやなかつたつて。

シーラはわたしに勧められたからやつてただけで、本当はもつと、他の事をしたかつたんじやないかつて」

●正面 30センチ

「優しく、穏やかに否定する。

確かに今週勉強会などに出たのは、主人公の勧めがあつたからである。
だが、決して嫌々行つていた訳ではないし、実際良い経験だつたと思つてゐるので】
⋮⋮とんでもない。

無理など、一つもしておりますませんよ】

そんな主人公を、シーラは優しく見つめ、きつぱりと否定して、主人公の不安をすぐに
払つてくれる。

少し猫背になり、主人公と目の高さを合わせて、手を握つて優しく言う。
だから主人公は思う。

そうだ。シーラはこういう人だ。

セツクスしてゐる時はとことん意地悪なくせに、それ以外の事で主人公とすれ違うと、絶対にこうやつて、優しく譲つてくれる。

わたしはそれに甘えながら、今日に至つてゐるんだ。

と。

……でも、果たして、それでよかつたのだろうか。

『お嬢様とメイド』としてならまだよくても。

『恋人同士』として、それは正解だつたろうか？

●正面 30センチ

「優しく、穏やかに否定する。

確かに今週勉強会などに出たのは、主人公の勧めがあつたからである。

だが、決して嫌々行つていた訳ではないし、実際良い経験だつたと思つてゐるので】
お嬢様のご提案は、とても有難いものでした。

私（わたくし）はお話を頂いた上で、自分で判断し。
納得したからこそ、今週このように過ごしたのです。

お嬢様に非などございません。

ただ……」

（主人公）

「ただ……？」

ゆえにシーラが『ただ』と続けた時、思わず主人公は繰り返した。

身を乗り出し、ぐっと近づいて、次の言葉を待つ。

シーラがこんな風に自分の気持ちを話してくれる時は、必ず真剣に聞かなくてはならない。

そう思つて、繋いだ手を握り返す。

二人の距離が、少し近づく。

●正面 15センチ

「穏やかに、少し申し訳なさそうに。

『今回、自分がもつとしつかりしていれば、主人公やあまね、日菜子を心配させる事もなかつた』と、シーラは思つているので

もし、何（なに）か問題があつたとすれば……それは私（わたくし）の方なのです』

（主人公）

「！」

主人公はその言葉に息をのみ、だが、すぐに口を開くのはやめて続きを促す。

正直な所、かけらも予想していない展開だ。

だが、主人公は己が少々視野の狭く、見落としがちな点が多い一面があるのを理解している。

だから……まだ何も言わずに待つた。

●正面 15センチ

「穏やかに、少し申し訳なさそうに。

今までよりも少し歯切れ悪く、年相応な感じで。

シーラはこの一週間、自分の考えを『勝手な思い込みである』と頭では理解しながら、感情が追い付かず、淋しくなつたり、不安になつたりしていたので。

それを、自分を想つて色々提案してくれた主人公に伝える事自体、申し訳ないので

その……これは、私（わたくし）の勝手な思い込みであると、勿論理解しているのですが。

その上で、聞いて頂きたいのですが。
実は……少し。

淋しく、感じてしまっていたんです。

『もしかすると。私（わたくし）はもう、お嬢様には必要ないのではないか』と、思つてしまつて……』

（主人公）

「え!?」

しかし、その『待ち』も、あっさり終わってしまった。

主人公がまたも予想できなかつたシーラの言葉に驚愕し、思わず声をあげる。

（正面 15センチ）

「申し訳なさそうに笑つて。

主人公の反応がとても可愛らしく、また『やはり自分の勝手な思い込みであつた』と確信できたので

ふふ……申し訳ございません

それから……微笑むシーラに向かつて、今年一番ではないかというくらいの勢いで否定をした。

△主人公

「な。何それ。なんでそうなるの？
そんな事ある訳ないじやん！
絶対ない！ 絶対ないから！」

だつて、一体全体、何をどうしたらその仮説に至るのか、主人公には全くわからないからだ。

主人公にとつての主人公は、いつでもシーラにべつたり甘え通しで。

『シーラが居なければ何もできないというか、むしろ、普段からして何ならできるのか？』
という人間である。

そんな主人公が、一体どこをどうしたら『シーラを必要としない』人間になれるのか。
まるでわからないからだ。

●正面 15センチ

「申し訳なさそうに笑つて。

主人公の反応がとても可愛らしく、また『やはり自分の勝手な思い込みであった』と確
信できたので』

ええ……勿論、解つてはいたのです。

『お嬢様なら、必ず否定して下さる』

『お嬢様は、私の為を想つて提案して下さつただけ』

『そこに他意は何もない』

と。

【申し訳なさそうに苦笑して。

『正直に自分の気持ちを伝えるか、質問をすればすぐに解決した問題なのに、できなかつた自分が情けない』という感じで』

……なのにどうしても、不安が拭えなくて。

つい、おかしな事を考えてしまつていたんです。

私（わたくし）も、まだまだですね』

〈主人公〉

「……ううん。おかしくないよ」

だがすぐに主人公は『わからなくもない』『おかしくもない』とも思えてくる。シーラが感じていた不安は、自分のそれと同じように思えてきたからだ。

●正面 15センチ

「優しく、だが意外そうに。

主人公の言葉が予想外のものだつたので

え？」

〈主人公〉

「シーラは、確かにありえない事を考えてたけど……。
そう考えちゃうのは……何も。変じやない。

だつて。シーラ、だけじやないから。

わたしも……同じように思つてたから」

言うと、主人公は両手を伸ばしてシーラに抱きつく。

シーラはそれを少しだけ驚きつつも、正面から受け止めてくれる。

S E 2 1 主人公がシーラに抱きつく音

【最初から最後まで流す】

【少しだきめの音量で流す】

二人の距離が、さらに近づく。

●正面　【※15センチほど上※】0センチ

「優しく、だが意外そうに。

シーラは『主人公も同じように淋しく思ってくれていたら嬉しい。もしかすると、そうなのではないか』と思つていた。

だが、いざそれが正解だったとわかると、嬉しい反面信じられず、思わず問い合わせてしまつた

お嬢様、も……？』

△主人公△

「……そうなの。

自分から提案しておいて、おかしいよね。

自分で別行動しようつて言つといてさ、ほんとはずっとシーラの事が気になつて、気になつて、会いたくてしようがなかつたの。

でも『言い出しつべだから』とか思つて、正直に言えなくて。

『もしかしたら、とかまで思い込んで。

一人で、すごい無駄な時間過ごしちゃつてたんだ』

ぎゅつとしがみついて打ち明ければ、少し上でシーラがほつと溜息をつくのが聞こえた。密着した事でシーラの鼓動が伝わって、主人公はホツとする。シーラもまた、自分と同じように不安を感じ、会いたいと思つていてくれた。その事実が主人公に自信を与える、温かくしてくれる。

●正面　【※15センチほど上※】0センチ

「優しく、愛おしそうに。

正直な想いを告げてくれた主人公の事が、とても愛おしいので】

ふふ……そだつたのですね……」

△主人公△

「そうだよ。ごめんね、シーラ。本当にごめん。

これからはもつと、何でも、ちゃんと話し合つてから決めよう。わたし、ほんとダメな主人だけどさ。

シーラともつといい関係になりたいから。

シーラの事、もつと大切にしたいから……」

だから、今度は素直な気持ちをすんなり伝えられた。

とことん素直になれない上、暴走ばかりで頼りない主人だが、自覚があるなりに今後良くなっていきたい。

主人公はそんな気持ちで、シーラに思いを打ち明ける。

主人公が一度少し身体を話し、顔を見ながら話すようになつた事で、高さがなくなる。距離感が『正面 0 センチ』になる。

●正面 0 センチ

「優しく、少し泣きそうになつて。

主人公がこんなにも自分を想つてくれていた事がわかり、とても嬉しいので】
ありがとうございます。

【嬉しそうに、しつとりと。

少し時間はかかつてしまつたが、この件を機に、主人公との絆がまた深まつたと思える
ので】

お嬢様。そのように想つて頂けて。

離れている間も、私（わたくし）の事を考えて頂けて。
とても……とても嬉しいです……」

（主人公）

「いつも考へてるよ！

いつも。ほんとにいつも、シーラの事考へてる。
だつてわたし……シーラの事、大好きだから」

（正面 0センチ）

「嬉しそうに、しつとりと。

少し時間はかかつてしまつたが、この件を機に、主人公との絆がまた深まつたと思える
ので

ありがとうございます。

（一呼吸おいてから。

穏やかに優しく。

改めて自分の気持ちを伝えるため、新しい話題を切り出す

お嬢様

（主人公）

「ん……？」

矢継ぎ早に思いを打ち明けていると、シーラがふと主人公を呼ぶ。

主人公はそれにすぐ応え、彼女の次の言葉を待つ。
ややあつて……シーラが自分の気持ちを話してくれる。

●正面 0センチ

「穏やかに優しく。

過去を振り返りながら、自分の想いを述べていく

私（わたくし）は貴方様に拾われ『お嬢様』とお呼びするようになつた日から。
ずっと、貴方様のお役に立つ事だけを考えて生きて参りました。

その過程で、貴方様をお慕いし。恋人として過ごせるようになります。
その日々を何よりも得難く、幸せなものに感じております。

【一呼吸おいてから。

少し緊張した様子で。

これから改めて、主人公に大切な事を伝えるつもりなので】

お嬢様。

ですから。

【優しく、真剣に。

改めて主人公に告白する。

ここでは従者としての自分の気持ちを述べている

貴方様を、誰よりも必要としていて。

貴方様が居ないと不安でたまらなくなるのは、私（わたくし）の方です。

【優しく、真剣に。

ここでは、あえて『貴方』と呼ぶ。

今度は、恋人としての自分の気持ちを述べているので

貴方が思うよりもずっと、私（わたくし）は貴方を欲していて、愛している。
どうかそれを……いつでも。覚えていて下さいましね……」

それはあまりにも嬉しく、幸福な告白だった。

だから主人公もまた、その想いに応えるべく、今の気持ちを述べる。

（主人公）

「わたしだって……そうだよ。

ちよつとよくない事もしちやうけどさ、

シーラがいないとやっぱ無理だわ。

少なくとも、今のわたしには早いんだってよくわかった。

だから、自信持つてよね。

あなたのお嬢様はさ。あなたがいないと全然ダメなんだから』

●正面 15センチ

「穏やかに微笑んで。

主人公が真剣に自分の気持ちを受け止めてくれるので。

また、主人公自身の気持ちも話してくれたので。

今度は従者でもあり恋人でもある『シーラ』としての気持ちを述べているふふふ……そうですね。

私（わたくし）ももつと、自信を持たなくては。

私（わたくし）は、貴方様が選んで下さったメイドなのですから……♥

〈主人公〉

「そうだぜ！」

こうして両手を上げて答えれば、シーラが泣きそうな顔で微笑んだ。そのまま優しく顔に手を添え、主人公を正面から見つめてくる。

●正面 0センチ

「少し泣きそうになりながら。
優しく。

主人公の顔を見ていたら、もつとその顔を見て、キスをしたくなってきたので
ああ……お嬢様。

もつとお顔をお見せ下さい。

この数日……ずっと。ゆっくりこうする間（ま）もなくて。
とても淋しかったのです……」

〈主人公〉

「ん……
♥」

●正面 0センチ

「〔※6回※ キスする。

ちゅぱちゅぱ音を立てる、甘々な、軽めのキス）
ちゅ。ちゅ。ちゅつ♥

二人、主人公が背伸びをし、シーラがそれを受け止める形で抱き合つて、キスをする。

ちゅるつ……ちゅぱつ。

……ちゅ
♥』

『主人公』

『シーラあ……』

だから主人公は、甘ったるくシーラを呼んで『もつと』とキスをねだりながら、どんどん思考がシーラに占められていく。

はあ……やば。

ちよつとくつついてキスしてただけなのに、なんか、もう。
もう……。

と、みるみるうちに発情していく。

恥ずかしい話だが、たったこれだけのふれあいで、スイッチが入つてしまつたのだ。

●正面 0センチ

『嬉しそうに、くすくすと笑う。

思わず笑ってしまう。

今主人公が考えている事が手に取るようわかるので一

ふふ。ふふふふ。

ふふふふつ♥ー

△主人公

「なによお……♥ー」

そんな主人公を見て、シーラがくすくす笑っている。
つくづく嫌味なメイドである。

どうせ、いや、きっと、おそらく。

△△主人公の希望的観測では、自分も似たような事を考へてるくせに。
まるで『性欲なんて概念は知らない』みたいな、ずいぶんと涼しい顔をしている。

●正面 0センチ

「嬉しそうに、くすくすと笑う。

思わず笑ってしまう。

今主人公が考へている事が手に取るようわかるので。

また、自分も同じような事を考へてゐるので】

いえ……。今、おそらく。

私（わたくし）とお嬢様は、同じ事を考へてゐるのではないかと思ひまして……

【※1回※ キスする。

甘々な、軽く触れるだけのキス】

ちゅ♥】

△主人公△

「それってさあ……。つまり……♥」

首に腕を絡ませながら聞けば、シーラはもう満足げだ。

主人公はまだ何も言つていないというのに、すっかり心を読んだ氣でいるらしい。だが、今の主人公はそれでも構わない。

つまるところ、主人公はいつでもシーラに意地悪されて、振り回されていたい。それこそが己の一番の幸せだと、今回の件でようやく理解したのだ。

●正面 0センチ

「嬉しそうに、くすくすと笑う】

ええ。ご想像の通りです」

シーラ、主人公の左耳に話しかける。

これによつて声の方向が『正面』から『左』になる。

●左 0センチ

「優しく、だが少しセクシーに。

ここからの展開を期待させる感じで】

今すぐ……貴方と触れ合いたい】

△主人公

「……」

●左 0センチ

「優しく、だが少しセクシーに。

ここからの展開を期待させる感じで】

幸い……今日はとても暖かい。

久しぶりに。ここで……致しましょう

♥】

ここでフェードアウトして終了。